

はじめに

『臨床の玉手箱』シリーズは、2023年2月に発刊された第1巻『小児歯科編』を皮切りに、2024年12月に第2巻『保存修復編』、2026年4月に第3巻『歯内療法編』と続き、本書はいよいよ補綴領域に足を踏み入れた第4巻『歯冠補綴編』となります。

本書は、企画の段階で「近年、圧倒的なスピード感で時代を凌駕するCAD/CAMの扱いをどうすべきか」という議論がなされました。本書の目的があくまで「基本」であれば、従来の間接法に支えられた鑄造冠を中心に据えた内容のみで十分でしょう。しかし、「次代を担う若手歯科医師向け」で、「日常臨床の問題解決の指南書」でありたいとするならば、CAD/CAMは審美性の項目とあわせて看過できない話題であり、未来への期待を込めて少しでも紹介していく立場を取りました。

第1章「総論」では、検査・診断に加え、補綴処置では切り離すことのできない材料について紹介し、マテリアルセクションに必要な知識を紹介しています。第2章「前処置」では、印象採得時に大切な歯周組織の状態を解説しながら、事前に必要な外科処置・MTMまで網羅しています。第3章「形成～印象採得」と第4章「咬合採得」、そして第5章「咬合調整～装着」では、いかに咬合調整量の少ない補綴装置に結びつけていくか、常に背景に潜む材料の問題も考慮しながら展開していきます。第6章は、現在の歯冠補綴で外すことのできない「審美補綴」の話題を、歯科技工士も交えシェードテイキングまで掘り下げてみました。第7章では、前述した「デジタルデンティストリー」の現状と問題点に触れています。最後の第8章では、できるかぎり欠損の改変を伴わないクラウン・ブリッジで対応した長期経過症例を取り上げ、口腔内で長期間機能した補綴装置の疑似体験の世界を誌面で創造してみました。

歯冠補綴装置で対応可能な症例群は少数歯欠損症例が多く、このステージでは齶蝕や歯内病変、歯周病といった一歯単位の病態評価および基本治療の技術的な習得・研鑽が問われます。また、咀嚼や審美といった機能回復において、患者に生来に近い状態を要望されるため、回復の目標値が高くなります。「技術的な目標値」として本書をご利用いただき、その上で患者の個性を上塗りし、多様性に対応する一助としていただければ幸いです。

監修 鷹岡 竜一